近石泰秋氏旧蔵の浄瑠璃本
――附リ・浄瑠璃本目録（稿）――

神津武男

はじめに

近石泰秋氏は、大著『操浄瑠璃の研究』正続二巻（風間書院、一九六一・一九六五年）を以て、人形浄瑠璃文楽の研究者として名高い。一九〇七（明治四十）年、香川県丸亀市生。香川大学名誉教授。一九九三（平成五）年死去。

近石泰秋氏収集になる浄瑠璃本のコレクションは、義太夫節の、厚紙の表紙付きで糸綴じの本と限っても、その数五八三点。個人の収書としては他に例を見ぬ大きさである。

筆者は二〇〇七年から〇九年春まで、近石氏御自宅（香川県丸亀市）でご長男・一弘氏とともに資料整理に携わった。本稿の第一の目的は、その際の調査内容を報告するため、浄瑠璃本目録を公開するものである。また蔵書の成り立ちにつき今後さらなる検討を加える便を求めたいと考え、いま把握するところの概要を述べることを本稿の第二の目的とする。

なお近石泰秋氏旧蔵資料群は現在、香川県立ミュージアムに移され、浄瑠璃本を中心とする和古書のほか、自筆原稿、蔵書（近代刊本）に至るまで「近石泰秋資料」として一括して整理が進められている。資料の閲覧利用は、同館での受入作業終了ののち、諸準備が整った時点での公開となることをお断りし、読者諸賢にはご留意下さるようお願い申し上げる。また本稿に使用する整理番号は、現在の整理作業に用いるものであることをお断りします。

まづは日本有数の浄瑠璃本の巨大なコレクションの散逸を防ぐにあたって英断を下された、ご遺族と、ご長男近石一弘氏に深甚の感謝を申し上げたい。

一、資料の概要と成り立ち

近石泰秋氏（以下、近石氏）に浄瑠璃本のコレクションのあることは、香川県下ではよく知られていたようである。筆者は二〇〇〇年以降、浄瑠璃本所在調査で訪問した複数の機関・関係者から、「近石泰秋先生のご自宅に」との所在情報を得ていた。しかし学界にはひろく知られた存在ではなかった。たとえば『義太夫年表　近世篇』の調査範囲には挙がっていない。

前述のように義太夫節の浄瑠璃本で、厚紙の表紙付きで糸綴じ本と限っても、五八三点を数える。内訳は、通し本五六五点、道行揃一八点。これ以外に、無表紙本（仮綴じ）の「抜き本」（いわゆる稽古本）二五六点や、義太夫節以外の流派の資料もある。

筆者の浄瑠璃本所在調査では、四国地方で愛媛大学附属図書館・一三一点、中国地方で広島文教女子大学附属図書館・四〇六点、九州地方で九州大学文学部国文学研究室・一三一点、を各地方での最多所蔵機関・点数と把握している。近石氏の浄瑠璃本コレクションは、四国ばかりか、中国・九州を含めて、近縁随一の所蔵点数を誇った。しかし同氏の個人蔵書はそれほどの分量を持ちながら、充分に注目されずにきたものと表現し得る。

無論、近石氏御自身の研究には充分活用された。一例を挙げれば、同氏も編纂に参加された『正本近松全集』（勉誠社、一九七七―一九九六年）では、諸本一覧に同氏所蔵本を掲げている。しかし後述する「道行揃」などは意を用いて収集しながら、まとまった論を為さずに終えられたものと見受けられ

る。ともかくも所在を公開しようと本稿を為す所以である。

近石氏は、どこから入手されたものか。これを考えるには、二種の目録が参考になる。ひとつめは「家蔵浄瑠璃本目録　向陽廬主人」（整理番号・くらZ-1207）、ふたつめは「昭和二十六年八月購入　浄瑠璃本目録　斑山文庫本　近石泰秋」（整理番号・くらZ-1205）である。

前者は「近石用箋」と印刷された罫線紙を束ねたものに五十音順に書名を順次書き加えていったもの。いくつかの書名に購入年・場所・金額を記すが、場所・年ともにまちまちである。購入年は、昭和十年代を記している。「向陽廬主人」は、近石氏の号と思われる。

後者は、「国立国語研究所」と印刷された罫線紙を袋綴じにしたものに、やはり五十音順に書名を記すが、記入は一時であったとみえる。「斑山文庫」とは高野斑山、すなわち日本近世演劇の研究者で、尋常小学校唱歌の作詞者としても名高い、高野辰之（一八七六―一九四七年）の蔵書である。近石氏は高野の没後、一九五一年にその旧蔵書を購入したものと思われる。

近石氏の浄瑠璃本コレクションは基本的に、右二種の目録に載るものの集合とみなしてよい。ただし近石氏は、時に必要な資料と交換するなどした模様である（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館・新見貫次文庫『崇徳院讃岐伝記』は、近石氏旧蔵書）。また時に売却した場合（広島文教女子大学附属図書館『日吉丸稚桜』ほか）もあった。このため右二種目録の集合を中心として、多少の出入りがあったのが現状のまとまりなのだ、と考えられる。

なお近石氏の没後には、香川県立ミュージアム（旧・歴史博物館）ほか主催の「平賀源内展」（二〇〇三―〇四年）へ出品提供された模様であるが、それも返却されていた。近石氏の意図せざる形での増減は生じていない、と筆者は判断している。

前者「家蔵浄瑠璃本目録」には、「宗輔作品中、求ムベキモノ」「近松半二ノ作品ニシテ不足ナルモノ」を列記する頁があり、近石氏の収集が計画的に進められたものであった様子が窺われる。何より筆者には、昭和戦前の時点で並木宗輔と近松半二のふたりに注目しておられたところに、のちの研究動向から顧みて先駆的な視点が近石氏にあったように思われる。

二、通し本・道行揃の稀書

通し本・道行揃の稀書を取り上げ、近石氏コレクションの資料的価値の一端を示したい。なお和古書類全体の印象として保存状態のよいものばかりとはいえず、むしろ美本というべきものは少ない。理由は、作品を網羅することに蒐集の主目的が置かれたため、と考えられる。これほどの稀書が近石氏の手元に集まったというのは、その蒐集姿勢の賜物と思われる。

本稿は目録を併載するので、書誌情報は目録を参照願うとして、ごく簡単に示す。まず通し本の部から天下一本五点。

〔1〕宝永七年（一七一〇）四月以前『椀久末松山』十行本

整理番号・くらZ-0998。糸屋市兵衛（大坂）板。

都太夫一中の八行本二板があるほかは、義太夫節の通し本としては従来、八行本一板が知られるのみであった。初めて中字本十行本の新出をみた。

〔2〕延享二年（一七四五）十一月『花筐女鉢木』五行本

整理番号・くらZ-1109。奥付なし。豊竹越前少掾引退披露の配り本。

巻頭に豊竹越前少掾（初代豊竹若太夫）の序文がある。本文は『北条時頼記』五段目節事「女はちの木」の抜き本で、節章を朱筆で書き入れている点に特色がある。本文は板行であるが、序文に越前少掾が「自ら朱点の節貼（ふしづけ）して」とあって、節章は、越前少掾自筆の書き入れと知られる。義太夫節草創期の太夫の墨跡として、文化財的にも貴重な資料である。

当該本について、近石泰秋氏も著書『操浄瑠璃の研究』口絵に写真を示し、「豊竹座開創前の若太夫」四二六頁に言及しておられる。越前少掾は、延享二年十一月『北条時頼記』興行を最後に太夫を引退した（以後は劇団の座本を勤めるほか、作者「梁塵軒」として活動することとなる）。引退興行では、三ノ切と、五段目節事「一世一代花がたみ女はちの木」を語った。当該本は、その引退披露の配り本である。

挟み込みの別紙に「昭和十四年十一月十九日新宿三越ニ於ケル一誠堂ノ古

書即売会ニテ求ム」云々、「向陽廬主人識」の墨書がある。既に「豊竹座開創前の若太夫」の要点が記されている。

〔3〕明和五年（一七六八）七月初演『粧水絹川堤』七行本

整理番号・くらZ-0903。鱗形屋孫兵衛（江戸）・森川豊助（大坂）板。

『義太夫年表　近世篇』は同作の諸本系統を徹底的に見誤ったが、当該本はその諸本系統の最初に置かれるべき、初板未改修本の新出である。

ただし当該本は、廿四丁裏六行目「『腹な小躰』は与右衛門が」の、『　』内を埋木している。校正段階か、刊行後に追加された改修であるのかは不明。当該箇所の改修以前の本の有無によって判断することになる。現状では、当該本より原初とみなすべき本を把握できないので、暫定的にではあるが――諸本研究は常に暫定的である――、当該本を「初板未改修本」と位置付けておく。

〔4〕安永四年（一七七五）九月初演『恋娘昔八丈』六行本

整理番号・くらZ-0826。伝法屋吉九郎（大坂）・中島屋伊左衛門（江戸）・中山清七（江戸）板。

独自の段編成をもつところに特色がある（目録備考参照）。

〔5〕寛政四年（一七九二）閏二月改題『累解脱打舗』七行本

整理番号・くらZ-0301。同作は、寛延三年（一七五〇）初演・初板の『新板累物語』を、寛政四年（一七九二）に改題したもの（内題、巻末の年記を埋木して改めた）。なお改題再演に連動した改修であるかは不明である。

従来、『累解脱打舗』は江戸板のみを把握してきたが、当該本の奥付は大坂板、大坂での後摺本の新出である。

筆者は、「江戸初演作品板木の移譲経過」（拙著『浄瑠璃本史研究』第二部「板元研究」第三章）において、江戸初演六十三作品の板木が、初演・開板の地江戸から大坂へ移動していく過程を整理した。『新板累物語』（『累解脱打舗』）は、大坂の板元の保有記録から「〔分類1〕文政十二年以前に流出したと推定されるもの（大坂・玉水源治郎の受け入れ）」と分類したが、大坂での後摺本の現物の新出をみ、具体的な裏付けを得ることができた。

次の資料は現存二点目という稀書である。

〔6〕明和六年（一七六九）四月『追善五十年忌』七行本

整理番号・くらZ-0620。正本屋小兵衛（大坂）・鱗形屋孫兵衛（江戸）板。

同作は、横山正著『近世演劇攷』（和泉書院、一九八七年）に図版で紹介され、横山氏個人の所有は知られていたが、公の機関に収まるものが少ない。筆者の調査では、広島文教女子大学附属図書館本と当該本の二点のみで、これ以外の所在を知らない。二点ともに虫損が生じているが、前者に多く、後者に少ないので、保存状態は当該本を良とする。

続いて「道行揃」の稀書。

「道行揃」とは、道行や節事といった優れて音楽的な部分を複数作から取り集めて一書となすもの。十八世紀前半までの人形浄瑠璃界では、素人が稽古を許されたのは道行・節事という、短い部分であったことに対応する存在である。素人の関心が「段物」、芝居・劇の部分へ進むようになると、段物を単行・抜摺する「抜き本」が登場して、旧代の「道行揃」は十八世紀後半には新規の編纂が止むというもの。この点は、拙著『浄瑠璃本史研究』第一部「浄瑠璃本研究」、第一章「浄瑠璃本の種類と性格」、五節「道行揃」に詳述しているので参照願いたい。

道行ばかりを載せ、段物をまったく含まないにも拘わらず、いまなお「段物集」という近代の演劇研究者が案出した用語で呼称されるほどに、研究の未熟なところのひとつであるが、近石氏は早く「道行揃」に着目され、収集を進めておられたことが知られた。

道行揃は、それ自体が稀書である。日本国内での浄瑠璃本所在調査に基づけば、「通し本」は三百五十七箇所に二万三千冊余を数え、「道行揃」は七十一箇所に二八二冊を数えるばかり。通し本の一％ほどしか残らない「道行揃」

は、ただでさえ稀少な資料である。

また道行揃の稀少性は、現存二八三冊の内の六五冊、二割超が「天下一本」であるという点にも示されている。「木板本であるのだから、どこかに同板本が残っているはず」と考えられやすいが、印刷本であっても、手工業による近世期の板本は、書写資料に劣らず、個性的な、唯一の資料である場合も少なくない。

天下一本の「道行揃」は、国内三十五箇所に所蔵されている。複数点を所蔵するのは、香川県立ミュージアム「近石泰秋資料」が七冊、神戸女子大学図書館（森修文庫）が四冊、天理大学天理図書館・東京大学総合図書館・東京大学文学部・東京都立中央図書館・福井県文書館・早稲田大学演劇博物館（辻町文庫）、安田文吉氏は各三冊。福井県文書館（桜井家文書）は伝世の古文書中にまとまって残存したものであるが、その他は研究者個人や研究機関が意を尽くして収集した資料である。これらの中にあって、近石氏が最多七冊の天下一本を収集しておられたことに、筆者は驚嘆を覚えたものである。

近石泰秋氏収集の天下一本の道行揃は、次の七点。

〔7〕享保十二年（一七二七）正月か『浄瑠璃二軒操』　整理番号・くらZ-1276。
〔8〕享保十九年（一七三四）二月頃『竹本常盤松』　整理番号・くらZ-1269。
〔9〕元文五年（一七四〇）二月頃『音曲姫舎松』　整理番号・くらZ-1271。
〔10〕寛保元年（一七四一）正月か『音曲軒玉水』　整理番号・くらZ-1279。
〔11〕宝暦二年（一七五二）正月か『音曲通天桜』　整理番号・くらZ-1274。
〔12〕宝暦九年（一七五九）二月頃『音曲調子笛』　整理番号・くらZ-1266。
〔13〕明和七年（一七七〇）正月か『音曲太平楽』　整理番号・くらZ-1278。

道行揃は、刊年を記さないのであるが、年ごとの出板であったらしく、前年の初演作品の道行を巻頭に据えている（大半は定番、スタンダードナンバーが並ぶ）。この点から、巻頭に据えられた作品の初演年をみれば、およその刊年を押さえることができる、と筆者は推定している。目録では、備考に年次推定の根拠を記しているので参照されたい。

〔14〕享保十九年（一七三四）八月『那須与市西海硯』　整理番号・くらZ-0183。
〔15〕元文五年（一七四〇）二月『鵺山姫舎松』　整理番号・くらZ-0185-②。
〔16〕寛保二年（一七四二）九月『鎌倉大系図』　整理番号・くらZ-0185-①。
〔17〕延享四年（一七四七）三月『万戸将軍唐日記』　整理番号・くらZ-0189。
〔18〕宝暦元年（一七五一）正月『玉藻前曦袂』　整理番号・くらZ-0186。
〔19〕宝暦四年（一七五四）二月『相馬太郎茅文談』　整理番号・くらZ-0193。
〔20〕宝暦九年（一七五九）三月『芽源氏鶯塚』　整理番号・くらZ-0191。
〔21〕宝暦九年（一七五九）九月『太平記菊水之巻』　整理番号・くらZ-0188。
〔22〕宝暦十二年（一七六二）閏四月『岸姫松轡鑑』　整理番号・くらZ-0187。
〔23〕明和四年（一七六七）十二月『染模様妹背門松』　整理番号・くらZ-0184。
〔24〕明和六年（一七六九）正月『振袖天神記』　整理番号・くらZ-0190。
〔25〕安永四年（一七七五）九月『倭歌月見松』　整理番号・くらZ-0192。

まとめにかえて

近石泰秋氏の先駆的な業績のひとつには、浄瑠璃「絵尽」の存在への注目があった。直接には著書『操浄瑠璃の研究』に説かれるところであるので、これに当たられたいが、「絵尽」の詞書から術語を拾い出し、浄瑠璃本読解の基本要素とみなした手法は、いまも鮮明さを失っていないと筆者は思う。

近石泰秋氏の手元に残されていた絵尽は、次の十一冊十二点。目録では省略したので、ここに紹介しておきたい。

近石泰秋氏の浄瑠璃本の整理に筆者が携わるに当たっては、田山泰三氏、内山美樹子氏の御高配を得ました。また御自宅での調査を許された近石一弘氏、ご遺族の皆様へ感謝申し上げます。また本稿をなすにあたり、香川県立ミュージアム御厨義道氏のお世話になりました。感謝申し上げます。

本稿は、平成二十三年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの作成と活用・公開に関する基礎的研究」（研究課題番号：22320054。研究代表者・神津武男）の研究成果の一部である。